

ヤオコー会長

川野 幸夫氏

②

勉強に運動に遊びにそれぞれ励んだ（小学6年生のとき）

私は埼玉県小川町に、父莊輔、母トモの長男として1942年に生まれました。祖父は清三、祖母は志げ、です。ヤオコーの前身の八百幸商店は、1890年に曾祖父の川野幸太郎が八百屋を開業したのがルーツです。その後、清三は八百幸を小川地方で一番大きな食品の商店にしました。ただ、清三には子供がいなかったため、私の親が養子になりました。

祖母は、八百幸の跡取りになるであろう私を自分の子供のように、ものすごくかわいがってくれました。両親と旅行に行った記憶はないのですが、祖母にはあちこちに連れて行ってもらいました。

祖父は小川町の青果海産物協同組合の組合長をやっていましたので、人望があったのだと思います。店の切り盛りは実質、私の両親がやっていました。当時は店舗と住まいが一緒でした

暮らしを変えた立役者

~HISTORY~



跡継ぎ意識せず気ままに

伸び伸びした子供時代

ので、私は両親の働きぶり 変に教育熱心でした。「勉強を毎日、目にしながら大きくなりましたが、両親は言われた記憶はないのです。つもぺこぺこお辞儀ばかりが、学校のPTAの会合などでは、仕事が忙しいのに必ず来ていました。後で弟に「商人になりたくない」と思っていました。

学校の成績はよかったと思いません。ただ、勉強が特別好きだったわけでもありません。一方で、母は

待ったのだと思います。祖父母が私をかわいがってくれる一方、母からすれば、私がしっかりした息子に育つことで、自分の存在感を示すつもりもあったのかもしれない。やはり将来の跡継ぎですから、きちんと育てるのは、母に課せられた責任で、その責任をしっかりと果たそうと思っていたのではないのでしょうか。

そんな母の思いを知らず、当の私はどうも、伸び伸びとした子供時代を過ごしてはいた。小川町は国鉄（現JR）の八高線が走っている。近所の友達と線路沿いの土手を走り回っていました。車もそれほど走っていません。道で鬼ごっこや縄跳び、かくれんぼをしていました。

今考えると悪かったなと思うこともありました。埼玉県では一毛作が盛んで、夏は米、冬は麦を植えている。農家が多い。私たちは麦畑に入って鬼ごっこや追いかけっこをして遊んでいました。本当は麦踏みというのは一定の方向にしないといけないのに、農家の人に見つかったら怒られるようなことだったと思います。

小学校の4、5年生の時に剣道を始めました。当時、黒沢先生という方が警察署の道場で教えてくれていて、そこに週3回くらい通っていました。少々荒っぽい稽古でしたが、先生と真剣に向き合う中で、腕前はどんどん上がりました。何より、私よりも年上の先輩をひっぱたくのは楽しかったです。小学校6年生の時には県の大会で優勝するまでになりました。

仲間と遊びながら、それなりに勉強もする。ごく普通の子供だったと思います。今みたいに小さな頃から受験だ、受験だというのは一切ないですから。昼間は外で精いっぱい遊んで、家に帰ってちよこつと予習復習をする、そんな感じでした。

日経MJ 2019年4月12日掲載